

オーストラリア ビクトリア大学コース

【実施期間】：2024年2月5日～3月17日（42日間）

【参加学生】：6名

【教育研究活動の内容】：

内容	事前研修 (渡航前)	教室内授業 (現地)	課外活動 (現地)
時間数 (H)	11.5	100	0

事前研修では、全体的な準備事項をはじめ、海外留学における危機管理及び海外での健康管理などについて詳細な説明を行った。また、過去に本コースに参加した先輩が、現地での生活、勉学についての経験談を紹介し、研修生活を充実させるためのアドバイスをしてくれた。

教室内授業は1A～6Bのレベルに分けられており、授業開始前のレベリングテストの結果に基づきクラス分けがされた。授業は、単語や文法の学習や、習ったことに関するクイズゲーム、音声を聴いて空欄に聞こえた単語を書いて聴解力を鍛えるなどの方法で進めた。授業内ではチームを作ってゲームをしたり、ペアで会話をしたりなど、みんなで発言する機会が多く、学生同士が仲良くなることができるシーンが多かった。宿題は毎日あり、小テストも頻繁にあったが、課題をこなすことで復習となり、次回の授業についていくのが容易になった。授業は、基本毎日2時間授業+2時間休憩+2時間授業の形で行ったため、休憩時間が長い分だけ、昼食後、各国からの学生が自然と集まりしっかり交流できた。

プログラム内に設定した課外活動はないが、大学ではサッカー観戦、サークルのイベント、カフェイベント、BAR イベントなどのイベントを開催したので、意欲があれば参加できた。

【教育研究活動の成果】：——参加学生が提出した「海外研修報告書」より抜粋、整理

1. 参加学生は教育面、生活面などにおいて日本と現地の違いを認識した。また、異文化比較を通して日本の長所と短所に気づくことができた：

- ① 教育面では、オーストラリアでは生徒が発言しやすい環境が整っているように感じた。日本では恥ずかしかったり、間違えたらどうしようという不安を持ったりするせいで、授業中なかなか発言せず、静かなクラスも多くある。しかし、オーストラリアでは、間違っても周りの生徒が温かくフォローしあっていたため、クラスの団結力も上がり日本では見かけない光景だと感じた。
- ② 授業はずっとプリントに何かを書いて勉強するわけではなく、体を使う授業だったりアクティブな授業が多く入れられていた。学外学習も多くあり、授業時間なども自分たちで早く始められたり自由にできた。

- ③ 授業は、ICT を通した活動が殆どであった。日本は、ICT をまだ導入しきれていないため、少し遅れているように感じた。
- ④ 日本の飲食店は土・日関係なく営業していることが殆どであるが、オーストラリア、特にカフェは、土・日は営業していない。また、ショッピングモールは平日でも 19:00 閉店と、日本より早い時間に労働者は帰ることができる。さらに、土・日の電車は動いてない路線もあった。休みの日は家族と過ごす、というスタンスがとても良いと感じた。一方、お酒を飲んだりして遊ぶのは日本の方が気楽に遊べると思う。
- ⑤ 日本では、年上の人と話す時、敬語で話すため距離を感じたり、仲を深めたりすることが難しかったりもする。しかし英語の環境では、言語から生まれる距離感や壁がないため、年上の人とも仲良くなりやすい。また、先生や店員と話す時もフレンドリーで堅苦しくなく会話ができることがよかった。
- ⑥ 日本では、年相応の服を着るべきだという風潮があるが、オーストラリアではそれが全くなかった。自分の好きなものを着て、互いの個性を認め合う国で本当に良い国だと考える。
- ⑦ オーストラリアでは多文化主義が根付いており、移民が多く、多様な文化が共存している。一方、人種差別がないわけではなく、人種差別のポスターを見てショックな思いをした。
- ⑧ 日本と比べると、オーストラリアのバスや電車などは、時間通りに来ないことが多い。日本と比べて遅延がとても多い。運行も低頻度である。特に郊外ではバスの本数が少なく、長時間待たされることもある。
- ⑨ 文化の違いを一番初めに感じた場所は電車の中である。電車の中では大音量で音楽を流している人や大きな声で電話・会話をしている人、自転車・スクーターで乗っている人などさまざまな人がいてすごく賑やかに感じた。
- ⑩ 一般道では歩行者優先ではなく車優先だといえる。歩行者の信号はボタンを押さないと変わらないし赤になるのもすごく早かった。渡りきるまで車も待ってくれるけど、優先は車だったと思う。
- ⑪ 路上たばこなどは法律で禁止されている。
- ⑫ 自動販売機が少ない代わりに浄水器が多かった。水筒さえ持っていれば飲み物にはほとんど困らない環境だった。
- ⑬ 街中に芸術品やモニュメントが多い。至る所にモニュメントやアート作品があり、街の公衆トイレや路上には絵画があった。芸術品は贅沢の中でも最高峰であり、芸術品にお金がかげられることに、近年の発展状況が垣間見られる。
- ⑭ リラックスしたライフスタイルが特徴で、アウトドア活動が盛んだと感じた。広い土地を持ち、一戸建ての住宅が多かった。生活の質が高く、自然との調和を大切にしているように感じた。

2. 参加学生は外国語学習や、異文化と触れあうことの楽しさを覚えたり、語学力、または勉強意欲やモチベーションを高めたりしていろいろ学び成長できた：

- ① オーストラリアは多国籍な人たちが多く、日本では味わうことができない感覚でとても新鮮だった。そして親切で優しい人たちが多く、たくさんの人と交流し、たくさんの海外の友達を作り、文化の違いを教えてもらったり、母国オーストラリアやベトナム、インドネシアの魅力を聞いたり、逆に自分が日本の魅力を説明したり、着物の写真を見せたりした。このように、いろいろなことを知りながら英語が学習できる機会はそうそうないため、とても素晴らしい経験ができた。
- ② 新しくできた友達とまた会うために、もっと相手のことを知り、自分の事も伝えたいと思うから英語を勉強した。授業でも日本語が使えないからコミュニケーションをとるためどうすべきかをずっと考えたから成長できていたと思う。実際リスニング力は周りの友達も気づくぐらい上がった。伝えたいこともある程度伝えられるようになったし色々なことが出来るようになった。
- ③ 今回のオーストラリア留学で学んだことは積極性だと考える。留学に際して事前準備を念入りにやってきたし、現地でも、新しい環境への適応、英語でのコミュニケーション、新しい友人との交流、授業やアクティビティへの参加、自主的な生活スキルの向上、そしてチャレンジ精神の育成と、積極的に取り組むことで多くの面で成長を実感した。この経験は、今後の人生においても大いに役立つと確信している。積極性を持って行動することで、新しい可能性が広がることを学んだ。
- ④ 留学してとても成長することができた。英語力の向上もそうだが、一番は積極的に行動する力や新しい場所になれる柔軟性を伸ばすことができた。
- ⑤ 留学に行って良かった。周りの目を気にしなくなった。失敗したら恥ずかしいなど今まで周りの目を気にしていたが、そう思わなくなり、日本にない海外の良いところも見つけることが出来た。日本は目立てば陰口を言われたり、誹謗中傷などを言われると思う。しかし、オーストラリアでは目立てばその分人気者になれた。日本にいる時は心苦しい時が多かったが、心苦しくなく毎日楽しい時間を過ごすことができた。
- ⑥ この留学で後悔したことは行きたいところに行けなかった事だ。なので、これからやりたいことが決まったら迷わず行動するよう、心がけたい。
- ⑦ オーストラリアはみんなが自分の意見をちゃんと持っていて話し合ったりした。留学生活を通じて私自身も人にあまり流されないで自分の中で自分の軸を持って意見を持てるようになれたと思う。

3. 参加学生は留学を自分を変えるきっかけとして捉え、目標を設けて積極的に行動することができた。また、留学をきっかけに新しい目線で物事を考えたり、自分の不足を認識したり、将来について新しい可能性を見つけることができた：

- ① オーストラリアの6週間という期間は最初長いと感じたが、終わる頃にはいろんな経験をして本当に濃い日々を過ごしたので短いけど長い期間だった。日本にまだ帰りたくないと思えたので、半年から一年で留学・ワーホリを考えたいと思えたいい経験だった。
- ② 私はこの42日間を過ごして、とても価値観が変わった。よくテレビで、日本はとてもいい国だ、他国の接客は最悪だ。他国は住みにくいという情報を耳にしていたが、全く違った。接客はとてもフレンドリーで丁寧だった。やはり自分の目できちんと確かめ、自分自身で経験しなければ分からないことが、たくさんあると考えた。
- ③ 私が、英語を学ぶ上で、会話中に翻訳を使わないことがとても大切だと考える。失敗しても気にしないという心意気で私は、翻訳をほとんど使わず生活した。分からない単語も、自分の知っている単語を組み合わせることで会話することを続けると、表現力がとても上がった。それに加えて本を音読すると、発音や語彙力、集中力が向上し英語を話す能力が最初に比べてとても上がった。例えば最初の頃は、単語と動詞を不器用に言うだけだったが、中盤～終盤にかけてはきちんとした文章で伝えることができるようになった。このような英語力の向上を感じると、留学に来て良かったと心から感じられた。

フィリピン ラプラセブ国際大学コース

【実施期間】：2024年2月4日～3月3日（29日間）

【参加学生】：4名

【教育研究活動の内容】：

内容	事前研修 (渡航前)	教室内授業 (現地)	課外活動 (現地)
時間数 (H)	11.5	72～	16～

事前研修では、全体的な準備事項をはじめ、海外留学における危機管理及び海外での健康管理などについて詳細な説明を行った。また、ラプラセブ国際大学の関係者が、(オンラインで) 現地での生活、勉学等について紹介し、研修生活を充実させるためのアドバイスをしてくれた。

教室内授業は、「English communication skills」、「TOEIC R&L」等の英語科目のほかに、英語での授業ではあるが、Filipino food culture や中国語、韓国語などの科目もあり、参加者が中から自分の学びたいものを選んで履修する選択制となっている。自分が興味のある科目を勉強できることでこのシステムは多くの参加者に評価された。授業中は、生徒同士で話したり、先生と話し合ったりするほか、自分の意見を言ったり、人が言ったことについて感想を述べたりして、どれもアクティブな活動ばかりだった。学外学習も設けられ、その場での課題が課せられ現地の人とコミュニケーションをする機会もあった。

課外活動は、buddy system に参加して現地の学生と交流することで設定された。buddy system は、教室授業後に設けられ、現地の学生と一対一で話す英会話レッスンのようなものである。参加者は現地の学生と一緒に話したり課題をしたたりするなど、決まりもなく非常にラフな感覚で行うことで、現地の学生と楽しみながら英語に親しみを持つことができた。Buddy system の他に、学内ではバレンタインイベントやヨガクラスも開催され、多くの人と多彩な交流ができた。

また、参加者たちは現地のフィリピン学生も入居している個室があるシェアハウス型の寮で滞在した。共有スペースで現地のフィリピン学生や他国の留学生とお喋りをしたり、一緒に勉強したり遊びに行ったりして様々な場所で交流することができた。

【教育研究活動の成果】：——参加学生が提出した「海外研修報告書」より抜粋、整理

1. 参加学生は教育面、生活面などにおいて日本と現地の違いを認識した。また、異文化比較を通して日本の長所と短所に気づくことができた：

- ① 学校の授業は一方的な講義ではなく、先生の方から話しかけてくれたり、学生が積極的に発表するスタイルだった。授業で習ったことをアウトプットしながら学べたので、普段より身に定着するスピードが速かった。また、失敗しても

いいからチャレンジすることが重要視された。

- ② 先生との交流も活発で、授業以外でも立ち話でコミュニケーションを図ることができた。特に印象的だったのは、先生同士の仲の良さだ。昼ご飯を一緒に食べたり、常に笑顔で楽しそうに過ごしている姿は、とても温かい雰囲気だった。
- ③ 日本の文化と比較したとき、フィリピンの文化はとても明るく自国愛が強いと感じた。研修先の大学の紹介映像からとても陽気な感じが伝わったし、現地の学生が披露してくれた歓迎ダンスも、振り付けや表情から明るい雰囲気を感じた。また、現地の人々の表情やジェスチャーも明るかった。
- ④ フィリピン人は、自分自身のことが大好きで、歌やダンスも大好きだった。音楽が流れると、自然と体を揺らして踊り始める。Instagramにある彼らの投稿には、加工されていないありのままの姿が溢れていた。まるでモデルのような写真の数々に、自分を表現する力強さを感じた。全てをオープンにさらけ出す姿は、日本ではあまり見られないものであり、非常に印象的だった。
- ⑤ フィリピン人はコミュニケーションをとるとき、率直な意見を言ってくれたり、打ち解けようとたくさん話してくれたり、興味を持ってくれる姿勢がかなり自分たちと違った。
- ⑥ フィリピン人は信仰心が深い。週末になると多くの人が教会を訪れ、神に祈りを捧げていた。教会で両手を握りしめ、頭を下げて熱心に祈る人々の姿は、日本では見慣れない光景だった。
- ⑦ フィリピンでは、食事を手で食べるのが習慣だ。最初は抵抗があったが、実際に体験してみると、食材の温もりや味をダイレクトに感じ、生きている実感を得られるような気がした。
- ⑧ フィリピンの気候は年中暑く、多くのカロリーを必要とするため、甘い味付けの料理が多い。また、水道水を飲むことができず、料理にもミネラルウォーターが使われているため、味や食感が違っていた。環境面では、車やバイクなどの交通量が多く、空気が汚れていたため、喉が痛くなったり、風邪をひいたりした。
- ⑨ 貧富の差が激しい。ナイトマーケット等の外でご飯を食べていると please give me money と言って近くに子どもが寄ってきたり、外の通路の端で横になって寝ている子どもがいたりした。
- ⑩ フィリピンでは、車のクラクションは危険を感じたときにするのではなく、他人に自分（車）の存在は気づかせるものである。そのため、自分が他人の横を通る時などに使いあっちこっちでクラクションが鳴っている状態だった。

2. 参加学生は外国語学習や、異文化と触れあうことの楽しさを覚えたり、語学力、または勉強意欲やモチベーションを高めたりしていろいろ学び成長できた：

- ① 留学中にたくさんの友達ができる。フィリピン人、韓国人、日本人と様々な国籍の人と出会い、色々な場所に行ったり、みんなとお酒を飲みに行ったりもし、

そこでの自然な会話は非常に新鮮で、夜遅くまで寮で話し合ったことも本当に楽しかった。

- ② 現地では、人前で話す機会や自分の意見を述べ、詳しく説明する機会が多かった。文化の交流だけでなく、将来に対する考えも共有できたので、様々なことを学ぶことができた。

3. 参加学生は留学を自分を変えるきっかけとして捉え、目標を設けて積極的に行動することができた。また、留学をきっかけに新しい目線で物事を考えたり、自分の不足を認識したり、将来について新しい可能性を見つけることができた：

- ① 今回の留学では、自分を試すという目標があった。そして、帰国して自分に問うと、「やり切った！海外でも自分の色を見せられた！」と胸を張って言える。これは自分にとって大きな自信となり、挑戦すること、行動することの大切さを改めて実感した。
- ② フィリピンは発展途上国であり、インフラは整っていない。移動手段はトライシクルという、バイクに荷台をつけた三輪車だ。カンボジアのトゥクトゥクに似ているが、乗客はバイクの横に横並びに座る点が特徴だ。乗り心地は決して良いとは言えないが、非常に安価であった。フィリピンの交通事情を見て、このインフラを改善したいという思いが湧いた。一方、これはフィリピンの文化であり、素晴らしいものだと強く感じた。私たちがフィリピンの環境にああだこうだというのは何か違うのではないかと感じた。
- ③ フィリピンでは人数オーバー等のルールや横断歩道が無かった。しかし、それを受け入れた時、日本ではあたりまえのことが海外ではあたりまえでないこともあり、「あたりまえ」と感じることはみんなそれぞれ異なるのでとても言葉について考えるきっかけになった。
- ④ 現地の学生や他国の留学生との交流から、みんな高校の時からプレゼンテーションやレポート作成すること、ディスカッションをすることが多いため、人前で自信を持って話せる、自分の考えを簡潔に述べ、理由を具体的に説明することも学んだことを知った。日本の教育では、人前で話す機会や意見を述べる機会が他の国と比べると少ないとわかり、人前で話す機会があったら積極的に経験していきたいと思った。
- ⑤ 私はプログラムの修了式で、フィナーレのスピーチを務めた。約 60 名の留学生（日本、韓国、台湾）の中で代表として選んでいただき、非常に光栄だった。なぜ自分が選ばれたのかは分からないが、最後までやり遂げることができたことは、自分にとって大きな自信となった。このような機会を与えられたのは、1ヶ月間一生懸命取り組み、自分の色を出せたからだと感じている。自分を表現することの素晴らしさを知った。
- ⑥ 今回の留学を終えて、次なる未知の世界を見たい！新たな人と繋がりたい！話したい！笑いたい！という気持ちが強く湧き上がった。

韓国 東西大学校コース

【実施期間】：2024年2月13日～3月2日（19日間）

【参加学生】：10名

【教育研究活動の内容】：

内容	事前研修 (渡航前)	教室内授業 (現地)	課外活動 (現地)
時間数 (H)	15.5	54	36

事前研修では、全体的な準備事項をはじめ、海外留学における危機管理及び海外での健康管理などについて詳細な説明を行った。また、過去に韓国を留学した先輩が現地での生活、勉学等について紹介し、研修生活を充実させるためのアドバイスをしてくれた。

教室内授業は、一緒に語彙と文型を学習した後、ペア練習と発表を行い定着させた。毎回簡単な課題が出されるため、前回の復習となり、効率的に学ぶことができた。研修の最後に、参加者は自己紹介を含み、韓国での思い出をパワーポイントにまとめて発表した。最終評価は、筆記試験のほかにこの発表の内容も考慮され総合的に判断された。

課外活動は多く設けられ、内容も豊富であった。韓国の歴史と文化を知るための釜山、慶州見学、歴史的な建築物の見学のほかに、もちづくり、お面や灯籠づくり、茶道、陶芸、韓国料理、テコンドー、K-POP ダンスなど様々なプログラムが組みられ、参加者が実際に作ったり、習ったりして身をもって体験できた。毎日違うプログラムが予定されていた為、いつも新鮮でワクワクしたと参加者から高く評価された。

【教育研究活動の成果】：——参加学生が提出した「海外研修報告書」より抜粋、整理

1. 参加学生は教育面、生活面などにおいて日本と現地の違いを認識した。また、異文化比較を通して日本の長所と短所に気づくことができた：

- ① カードを使い公共交通機関の利用やショッピングをすることが当たり前だった。クレジットカード大国と言われるくらい百貨店やマート、コンビニ、タクシーだけでなく、市場や屋台・個人商店でクレジットカードの使用が可能だった。野村総合研究所の「キャッシュレス化推進に向けた国内外の現状認識」の調査によると、2016年には韓国のキャッシュレス普及率が世界で最も高い96.4%となっていた。
- ② 韓国は交通の便がいいなと感じた。日本と比べてバス、電車、タクシーの乗車賃が大幅に安価なことに驚いた。
- ③ パリパリ精神（早く早く）という言葉があるように、韓国人の方は、常に急いでいるイメージがあった。交通面に関して、基本的に人より車が優先であり、一般乗用車だけでなくタクシーやバスの運転が荒い印象だった。キャッシュレ

ス普及率が高いように、効率やスピードを重視していることがわかった。

- ④ 車の利用が多く、道では交通量の多さやスピードが速いことにも驚いた。車の運転が荒いこと（歩行者優先ではなく車が強引に来る）、歩行者が信号無視すること、クラクションが常に鳴り響いている状況だったので常に危機感があった。高級車のような車ばかりで、中も見えず運転手がどこを向いているか確認できない為、自分の身は自分で守る事が出来るよう周りに目を配り気をつけていた。
- ⑤ お店の人が働きながら携帯を見ていることや、お客さんが来ても目も合わせず接客している、屋台の衛生面など日本との違いを大きく感じた。しかし、質問するとスマホで調べて答えてくれたり、ジェスチャーで教えてくれたり、せっかちと言われているが、助けてくれる人が多かった。
- ⑥ 韓国の接客は少し雑で日本ほどレベルの高い接客態度が求められていないため、少し羨ましくも感じた。韓国の良さだと思う。一方、改めて日本の接客はいいものだったし、好きだなと思った。
- ⑦ 思った以上に日本語を話せる店員さんが多くて驚いた。それと同時に日本では、東京や大阪など大きい都市で、そこまで外国語を話せる店員さんがいないような気がして、もっと外国語を話せる方がいたら、観光客も安心して観光できるだろうなと感じた。
- ⑧ ご飯を食べるときのマナー（お皿を持ち上げない、食事をする時少し残す、食べる時に肘をついたり立て膝をする）は日本と違ってびっくりした。茶道も、日本での茶道は正座が基本だが韓国の茶道ではあぐらだった。
- ⑨ 歴史的な建造物、特に、寺院の作りや大仏が日本のものとほとんど差がなかったことから、日本と韓国は同じアジア圏であるという近さを感じた。幼児教育についても園の見学をした時、日本の保育・幼稚園と変わらないように思ったので同じように近さを感じた。
- ⑩ 学力世界と言われているが、東西大学の学生と話していると難しい日本語も理解していたり、将来は日本で働きたい、他の言語も勉強したいなど、向上心がとても伝わってきた。春休み期間だったが、図書館に行くと勉強している人も多くいた。
- ⑪ 韓国はかなりの上下社会であると感じた。日本では、先生に対して砕けた敬語やタメ口で話す生徒が一定数いる中で、韓国ではそのようなことは殆どないらしく、韓国の学生が驚いていた。

2. 参加学生は外国語学習や、異文化と触れあうことの楽しさを覚えたり、語学力、または勉強意欲やモチベーションを高めたりしていろいろ学び成長できた：

- ① 旅行では気づかない文化の違いを発見し、意味が分かることでその文化を尊重し、理解することができた。周りのことは自分でどうにかしないといけないので自分から行動する主体性も身に付いた。

- ② つねに私たちが飽きないように授業を楽しくしてくれたため、約1ヶ月退屈することはなかった。難しい韓国語でも少しは好きになり、ちゃんと頭に入った。また韓国だけではなく、他国への留学でも行ってみたいと感じた。
- ③ 楽しく勉強が出来て短い1ヶ月だった。初めて勉強が楽しいと思った。
- ④ もっと韓国語を勉強して、翻訳機なしで現地の人と不自由なく会話やコミュニケーションを取れるようになりたいと改めて感じた。
- ⑤ 今回の留学では韓国語でのコミュニケーションを多くとりたかったので翻訳機や英語は使わないようにしていたので自分の韓国語に自信が持てた。これからは韓国語の資格や勉強も続けていきたいと感じ、他の言語も学んでみたいと考えた。このように今回の留学から多くの大切なことを得ることができた。
- ⑥ 日本では勉強しても使う機会がなくなか上達しなかった。実際に現地でネイティブの人と話すとき少しづつ話せるようになり、お店や駅などで必要最低限使える単語等も覚えることができた。留学初日に比べて、日に日に話せるようになっていき、それがとても楽しくてもっと話したいと思った。留学に行ってもっと韓国が好きになり、もっと勉強してまた行こう思う。また、知らない場所に行くと違う言語を使う人たちと暮らして、世界は広いと感じた。そのため、もっと色々な国を巡り色々な人と出会いたいと思った。その夢が実現できるように勉強をたくさんして、アルバイトもたくさんして必ず行けるようにする！

3. 参加学生は留学を自分を変えるきっかけとして捉え、目標を設けて積極的に行動することができた。また、留学をきっかけに新しい目線で物事を考えたり、自分の不足を認識したり、将来について新しい可能性を見つけることができた：

- ① 韓国と日本は対立のイメージが今もまだあるのでは無いかと予想していた。しかし、実際にはそんなことは全くなかった。日本語で話しかけてもらったり、分からないとジェスチャーをしてくれたり、助けられて貰うことが多く、優しい人が多いことを知った。今後、韓国で日本が人気であり、日本では韓国が人気になっているように、隣の国として更に良い関係を築きあげることができたらと強く感じた。
- ② 日本で韓国に行く前にネットで、韓国では食器を持ってご飯を食べるのはマナー違反という動画を見た。しかし、実際現地に行くと、そういったことはなく今はみんな食器持っているらしい。日本で聞いている韓国の文化やマナーは少しずつ変わっていったのだと思った。